

弘教寺



第五号



発行所

〒370-0131
伊勢崎市境米岡二七九-二
浄土真宗本願寺派弘教寺内
寺報編集部責任者 玉田 忠
電話0二七0(七四)0五七三

親鸞聖人を偲んで

―念仏の声高らかに―

弘教寺住職 中山 英昭

報恩講法要が各地の真宗寺院で勤まる季節となりました。ご承知のように、念仏のみ教えを伝えて下さった親鸞聖人(以下聖人と記す)のご遺徳を偲び、そのみ教えに出遇(であ)う大切な法要であります。

以前、大間々町の西福寺住職阿部先生がお話し下さったことですが、蓮如上人五百回遠忌のおり、ご門主様が法要に参拝された門徒の皆さんに対して、「お念仏申しませう。」と初めておっしゃったそうです。

戦後まで、本山でも地方の寺院でも、本堂に満席の門信徒が集い、割れんばかりの称名念仏の声が、堂内に響きわたった時代があったのです。

一月の本山ご正忌報恩講法要に参拝しました際に、最前列で、念仏の声高らかに称(と)な)えていらした年輩の女性がおられました。本山にお参りできたことの喜び、法要に出合えたことの喜びから、声が自然に高まったものなのでしょう。数十年前、堂内を埋め尽くした門信徒の称名念仏が、この女性のような

ものであったならば、一声と一声が共鳴し、堂宇を振るわせ、筆舌につくせぬ程のものであったと思われれます。

聖人のお書きになった浄土和讃の中「十方微塵(みじん)世界の念仏の衆生をみそなわし 撰取して捨てざれば 阿弥陀となづけ たてまつる」と、念仏の衆生を撰(おさ)めとつて、決して捨てることのない仏様が、阿弥陀様であると示されていらつしやいます。

また、「弥陀の名号となへつつ 信心まことにするひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり」とも示されております。

必ず仏にすると誓われた阿弥陀様のご本願を信じ、この私が死んで後、間違ひなく仏とならせていただく身のしあわせを思う時、報恩感謝の思いから生まれるものが、お念仏であります。

最近の風潮として、お念仏を称える方が※



※いなくなつたという現象面だけではなく、本質的な、仏教離れ、寺院離れが、より深刻な問題となつています。戦後世代が、日本社会の中心を占める割合が増すほど、その傾向は顕著になつてきたように思います。

一方で、相田みつをさんや星野富弘さんのように、宗教を背景にした詩などは、多くの方に感動を与え、読まれていますし、瀬戸内寂聴さんが、住職をしていた東北の小さな寺院には、千人単位の人びとが集まり、収容しきれず、青空説法をした様子が、NHKで紹介されておりました。また、書店にはたくさんの宗教関係の本が並んでいます。

そうしたことを考えました時、宗教はどのような時代であつても、不要ということではなく、伝える側と求める側とにズレがあるということに思い至ります。

とくに、伝える側は、伝統的なことを重んじるあまり、求める側のニーズに答えていない。そんな反省が生まれてまいります。一方で、伝統的なことを守ることとは大切ですが、実態に即し、どうしたら、求める側の思いに答え得るかを模索し、伝える側が、歩み寄ることも必要であるような気がします。

聖人が九十年のご生涯を通じて、歩まれ示されたお念仏の道を、「南無阿弥陀仏」と声高らかに、ともに歩んでまいりたいものです。

称名

◆念仏に生きた人◆シリーズ

Ⅲ

「義母と念仏」 伊勢崎市 田中邦子



義母「田中みさ」さん

私と義母との出会いは私達の結婚が決まった後、挨拶に見えた時でした。同じ浄土真宗の門徒と言うことで、義父母は大変喜びました。私の家と嫁いだ田中家の信仰の深さの違いには驚きました。

私の両親は若い時、新潟より伊勢崎に来て店を持ち家業が忙しいこともあり寺には、報恩講、永代経の各法要に何う程度でした。田中家では家族全員で、毎朝夕正信偈を勤めて生きていく喜びに感謝の日日でした。私には仏様に手を合わせなさいとか、お寺参りをしなさいとか強要はしませんでしたが、自然に仏様に向かうのを待っていたようです。

田中家の兄弟は幼い時から両親の後姿を見て身に付いたと思います。仏壇の「ミテゴザル」が良い教訓になったのだと思います。義母が昔嫁いだ旧家で姑、小姑に苦勞した事を私によく話してくれました。三十九年も一緒に生活しましたが、義父母は互いに争った事や口ごたえなどした事は一度もありませんでした。

交通事故で義弟が亡くなった時、涙ひとつこぼさず「この子の与えられた命」と、しっかりした態度に強い人と思いましたが、日常の信仰の賜物だったのでしようか。

普段は質素儉約で生活し、困った人には親切に物心共に施し、決して報酬を求めることもなく、人に親切に出来る事を喜ぶ、仏の心を持った人でした。

義母が病に伏した時、また亡くなった時、お世話になった人達から感謝の気持ちをお聞きして義母の生き方に、仏の教えを感じました。私もご聴聞を重ね仏恩報謝の日日を送りたいと思います。

喜びも 悲しみも
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
楽しむも 苦しむも
なむあみだぶつ

義母の念仏は、この文につきる感謝の日日だったと思います。

合掌

◆朝夕 み仏さまに お参りしましょう◆



仏教の豆知識

(1) 「念珠」^{ねんじゆ} について

念珠とは、仏様をお参りするときに使う法具です。他の宗派では「数珠」(じゆず)とも言いますが浄土真宗では、念仏の数を数えませんので「念珠」(ねんじゆ)と言います

念珠

男性は紐房 (ひもふさ) 女性は切り房 (きりふさ)

浄土真宗の念珠は 一輪の単念珠 (在家者は 二連珠を用いない)

念珠は 房を真下にし 合掌した両手に掛けます

浄土真宗の心得より

念珠は宗派によって形状が違いますので、浄土真宗本願寺派(お西)用を使いましょう。念珠は、お守りのためには着用しません。従って、「念珠の玉の数」や「念珠の材質・色」にもこだわりません。門信徒用は通常一輪の短念珠で、男性は「紐房」(ひもふさ)、女性は「切り房」(きりふさ)を用います。念珠を持つときは、常に左手の親指と他の四本の指の間にかけて持ち房は下方に垂らし、親指で軽くおさえて持ちます。合掌のときは両手にかけて、房は下方に垂らし、親指で軽くおさえます。片手だけに念珠をかけたたり、珠をこすり合わせて音を出したり、手のひらの中で握りしめたりはしません。念珠は大切な法具ですので、床や畳の上に直接置いたりしないようにしましょう。



感謝状の授与（福永会長から中山さんへ）



フラダンス・ユカレリの踊り

婦人会創立35周年
式典の様子が上毛
新聞に掲載される！

◆ 仏教婦人会35周年を祝う ◆



来賓祝辞

弘教寺役員代表
総代 田中岩男様



◆ロス・アモーレス◆



来賓祝辞

群馬組仏婦連盟会長
西蓮寺 伊澤 敏様

法話・西蓮寺住職 艸香先生



コーラス「アザレア」の讃仏歌

十月二十日弘教寺仏教婦人会創立三十五周年を迎え、式典と記念コンサートが開催されました。式典ではコーラス・「アザレア」が、そして、コンサートではフラダンス・「ユカレリ」が参加させて頂きました。記念コンサートでは、ロス・アモーレスのラテンムード歌謡やロマンチックなハワイアン音楽等で沢山楽しませてもらいました。本堂はまるで南国ムードたつぷり。常夏のハワイの気分でした。ビハラ活動のひとつとして始めたフラダンスが、この様な素晴らしい生演奏で踊れたこと、フラガール全員が今までに一度も経験したことのない緊張と感動のひとつでした。

新調したムームーの姿、何歳位に見えましたか？ ムード歌謡では馴染み深い曲、内田さんのムードたつぷりの甘い歌声に聞き惚れました。緊張の中、体で歓びを感じ心癒されました。コーラスとフラダンスの活動で、いままでと違った思い出に残る三十五周年になった気がします。

（野水 記）



挨拶 弘教寺仏婦会長
（福永 君代）



献灯・献華・献香



式辞 弘教寺住職

いきいき！子どもの集い・夏 第十二回

子供たちと声を合わせての「重誓偈」の後、ご住職から「南無阿弥陀仏」は、「ありがとうの心」とお話を頂きました。紙芝居「砂漠の井戸に朝が」は、自分勝手なキツネの王様と人々に潤いを与える井戸のお話。「かみしばい、ありがとう。また読んでください。」等の感想が寄せられました。お祭り広場は、毎年子供たちのお楽しみ。子供は、生き物が大好き！と再確認。イカに食いつくまでじつくり待つてるザリガニつりとぬるぬるしてても素手がいいドジョウつかみが大人気。スタツフ手作りの輪と特製シャボン液で作った初めてのびつくりシャボン玉が、人の頭より大きくなつて青空にフワフワ。乳母車の赤ちゃんが、目を丸くして喜んでいました。時々美味しいスイカや飲み物で喉を潤し、スマートボールや輪投げで貰った景品と釣上げたヨーヨーを持って、遊びまわつた午後でした。



びっくりシャボン



今年もスタツフや応援の皆さんに感謝！

りなちゃんの感想

◆この人◆「丸岡カツ」さん(境米岡)

—九十二歳！ ますます元気に
詩吟、俳句、短歌、漫画を—
一人住まいのお宅を訪ねると、こぼれるような笑顔で出迎えてくれた。

「身奇麗に生きて老いたし藤の花」

俳句のように、手入れの行き届いたお住いの茶の間には大きな仏壇。片付いた部屋は開け放され、カツさんは、よく透る声で話し始めた。
ご主人が六十二歳で亡くなったのは、カツさん五十八歳のとき。ぼんやり過ごす日。前住職から、弘教寺に婦人会が出来たからどうかと、勧められたのが入会のきっかけ。従つて婦人会の第一期生で、会長の宮崎せいさん、岩瀬モトさん、小林正子さんたちとご一緒だつたとのこと。

昨年、ご主人の三十三回忌を行い、そのときの写真には、三人の子供、四人の孫、六人の曾孫たちの顔ぶれが並んだと嬉しそうに語る。
詩吟二十五年で八段、よく透る声は、おなかの底から出す声で、呼吸も整い、健康にいららしい。また、俳句や短歌は、地元広報に何年来も掲載された。上毛新聞の文芸欄のカツトにも採用されているとのことである。

「いつの間に卒寿もすぎて誕生日よくぞ生かされ生きしと思う」
合掌



イラストの一部 取材中のカツさ

◆ 行事予定 ◆ (平成18年12月~平成19年3月)				
月別	弘教寺の行事予定		教区・群馬組の行事予定	
12月	2日	仏壮・仏婦合同報恩講 お寺deコンサート・3	7日 ~8日	組内会
	3日	報恩講法要 満座法要・ご法話		
	11日	婦人会例会		
1月	1日	元旦会		
	13日 ~15日	御正忌報恩講参拝 と冬の京都の旅	13日 ~15日	北ブロックの御正忌 報恩講参拝
	19日	婦人会例会		
2月			5日	組 ビハーラ 若宮苑涅槃会法要
	20日	婦人会例会		教区仏教壮年会連盟 結成記念日研修会
	25日	壮年会例会(第6回)	10日 ~11日	
3月			18日 ~24日	春のお彼岸
	26日	婦人会例会		

◆ 編集後記 ◆

婦人会創立35周年おめでとうございます。今日まで一度も休まず継続されたことに、心から敬服をします。生パトで踊るワグダンスに参加者一同が魅了させられました。パツギー！壮年会も来年は10周年です、婦人会を手本に、共の活動を期待します。「寺だより」も5号となり、身近なものを企画・編集してまいります。